

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20820068
 研究課題名（和文） 経済発展方法の可能性と限界：フィジーの開発モデル村落に関する文化人類学的研究
 研究課題名（英文） Assessing the Possibilities and Limitations of a Method for Economic Advancement: A Cultural Anthropological Study of Model Villages for Development in Fiji
 研究代表者
 丹羽 典生 (NIWA NORIO)
 国立民族学博物館・研究戦略センター・助教
 研究者番号：60510146

研究成果の概要（和文）：本研究は、開発モデル村落の変容について文化人類学的に考察することで、経済発展と伝統文化の関係をあきらかとすることを目的とした。成果としては、フィジー諸島共和国の諸村落が経営する協同組合を事例とする民族誌的調査の遂行を通じて、経済開発の導入と進展に際して伝統意識が与える影響について明らかにした。なお、本研究を内容の一部とする単行著を 2009 年に刊行し、同著で 2010 年第 9 回オセアニア学会賞を受賞した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project is to understand the relationships between economic advancement and traditional culture by exploring the model village for economic development from the anthropological perspective. As the result of the research project, I can make clear how attitude toward tradition affects the way of accommodating the concept of the economic development. Part of this research result was published in 2009 and the book was awarded the prize of Japanese Society for Oceanic Studies in 2010.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,330,000	399,000	1,729,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,530,000	759,000	3,289,000

研究分野：社会人類学・オセアニア地域研究

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：(1)文化人類学、(2)開発、(3)社会運動、(4)オセアニア、(5)フィジー

1. 研究開始当初の背景

第三世界の開発という問題設定が生まれたのは、第二次世界大戦後の冷戦下を背景としており、現在でも南北格差、貧困などと関

係して開発は重要な研究主題となっている。なかでも、現地社会に混乱を持ち込まない開発、土着社会に根ざし現地の人々が主体的に参加できる開発とは何か、現地の人々が開発

現象をいかに概念化しているのかという開発の意味論的側面は、ことに文化人類学の研究対象になっている。本研究では、以上の先行研究を踏まえ、開発を生活者の経験という次元で考察するために、生活水準の向上を目指して人々みずから興した自発的な村落開発事業を具体的なトピックにすることで伝統と開発の関係について一端を明らかにすることを試みた。

本研究課題に取り組むに当たって、申請者は、オセアニアのフィジー諸島共和国を事例として取り上げる。オセアニア諸国家は、飢餓に代表されるような極度の貧困こそ生まれていないが、パプアニューギニアを例外として、マイクロステートと呼ばれるような過小な人口規模であること、天然資源に恵まれていないこと、中間層の海外流出が盛んになりつつあること、各国家は海外移住者からの送金に依存した経済構造となりつつあること、そして世界経済の周辺部に位置することなど、独特の経済的問題を抱えていることがこれまで指摘されてきた。

ことにフィジーは、総人口の約半数を移民の末裔であるインド人が占める多民族国家で、先住系フィジー人（以下、先住系は、フィジー人と表記）の経済進展の遅れは、植民地時代から問題視されていた。1960年前後には、政府主導で開発問題に関する学術調査が複数行われ、1980年代には、先住民に対して資金援助が優先的に割り当てられる政策も採られた。1987年に、フィジー人とインド人の民族間対立及びフィジー人の経済発展の遅れを理由の一端として、オセアニア史上初の軍事クーデタが起きてからは、より排他的な先住民族優遇政策というかたちでの開発政策が遂行されてもいる。

つまり、フィジー人の開発という話題は冷戦以降一貫して着目されてきたのみならず、ことにクーデタ以降はアカデミックな研究課題という枠に収まらない重要性を抱えているといえる。そしてフィジー人の開発問題の特徴として、開発と彼らの伝統文化の適合性がつねに議論の対象とされてきたことが指摘できる。

2. 研究の目的

本研究は、開発モデル村落の変容について文化人類学的に考察することを通じて、どのような経済開発の方法が優れていると理解されてきたのか、また、その現在における有効性について明らかにすることを目的とした。具体的には、以下3点の課題を設定し、それに対する回答を試みることで研究課題を推進した。

(1) 開発観に関する系譜学的研究：フィジー

の開発レポートの分析を通じて

フィジー社会のいかなる側面（具体的には伝統文化など）が開発にとって必要・不必要と判断され、問題視されたのか、そしてどのような解決策が模索されたかについて考察した。いわばフィジーを事例とする開発モデル観に関する系譜学的な研究といえる。

ことにフィジー政府は近代的な市場経済へのフィジー人の参入に対して特別な配慮をしていた。歴代の政府が刊行してきた各種レポートの精読を通じて、政府が抱いていた開発モデル観とその変遷について明らかにした。

(2) 開発モデル村落に関する歴史人類学的研究

生活改善運動、協同組合運動など草の根の村落開発事業に着目しつつ、かつて開発モデル村とされた村落での調査に基づいて、個別具体的な開発への取り組みの様態を明らかにする。本研究では、そうした自発的な諸事業のなかでも開発レポートにおいて特別な注目を集め、1960年代頃、フィジー各地の人々から、フィジー人の開発モデルと称揚されたダク村落の開発事業を取り上げた。

フィジーのみならずオーストラリア、ハワイなど世界各地の古文書館に収蔵された史資料の収集・分析や村落に伝えられている開発事業にまつわる口頭伝承の収集・精査を通じて、ダク村落開発事業の歴史的展開の全体像を、歴史人類学的手法を用いて実証的に明らかにすることを試みた。

(3) 開発モデル村落における民族誌的研究

本研究では、文化人類学的手法に基づく住み込み調査を行うことで、ダク村落開発事業に関する現在の姿について民族誌的調査を行う。かつて独自の事業を生み出し生活水準の向上に成功したため、開発モデルとされた村落の現状を包括的に研究することは、その開発方法の有効性について現在の視点から批判的に検討することで、現在関心の的となっている研究に対して貢献することができる。

3. 研究の方法

開発に関する文化人類学的研究では、特定の開発事業が現地社会に与える影響について考察するのがオーソドックスな手法のひとつとなっている。しかし、その事業自体が現地社会からどのように受けとめられたのか、あるいは社会の側がどのような開発観を持っているのかという、いわば開発の意味論ともいうべき側面を取り込んだ分析は近年着手され始めたばかりの研究領域である。

本研究では、第一に、特定の地域を選定し、

同地に関して刊行された開発問題に関するレポートの内容を精査するという方法で、研究対象である社会がどのような村落開発事業を選好してきたのかという開発観を明らかにする。ひいては、どのような種類の開発に現地社会側が肯定的あるいは否定的な関心を向けてきたのかという、社会がもつ開発に対する価値観にまで踏み込んだ分析を行いたい。その上で、第二として、かつて注目を集めていた開発事業が遂行されていた村落の歴史と現状を、歴史学的史料批判と文化人類学的民族誌調査の方法を統合することで、経済発展の方法の可能性と限界を明確化したい。

4. 研究成果

研究成果としては、以下の文献調査、現地調査を遂行することができ、それを踏まえて、単行著1冊、論文5件、学会発表を8件のほか、12件程度の短い文章を発表した。2009年に刊行した単行著『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』は、これまでの研究成果の取りまとめとしての性格もある。本著作は、2010年に第9回オセアニア学会賞の受賞作品となった。

さらに、本研究テーマの一部を発展させた共同研究会（『オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究』）を、2009年度より、国立民族学博物館にて発足させるという形で、研究課題を発展させている。

(1) 文献調査

フィジーの国立古文書館、南太平洋大学パシフィック・コレクション及び、オーストラリア古文書館、聖マルコ図書館、オーストラリア国立大学図書館に所蔵が確認されているフィジー関係資料（ダク村落の1960年代に関する資料）の調査を遂行した。

(2) 現地調査

フィジーのダク村落関係者中心に聞き取りを進めるとともに、開発プロジェクト関係資料の閲覧複写を進めた。

本研究の調査・成果公開を通じて得られた具体的な知見としては以下の項目を挙げることができる。

①フィジー、オーストラリアの各図書館・古文書館での調査の結果、これまで確認されていなかった歴史資料の発掘することができた。具体的には、調査村落と1950年代にかかわりを持っていた牧師の残した手記、1960年代にダクを訪問した研究者の調査ノートを入手することができた。

②調査対象村落関係者が所蔵していた、1940年代から1960年代にかけての貴重な文字資料を収集することができた。現代でもオーラルな形で歴史の継承を図る傾向が強いフィジー村落部において、一般の人々の暮らしを解き明かすことが可能な資料の存在は、稀有なものである。

③現地調査を通じて、ローカル社会の微細な人間関係が開発プロジェクトに与える様態を観察することができた。同時に、かつて推進されていた開発事業が現在どのように継承されているのかという現状についてある程度知ることができた。現地の人にとって開発がどのような意味を持っているのかを理解するためには貴重なデータとなっている。

④同時に、かつての開発プロジェクトの様態に関する古老からの聞き取りを通じて、文字として残されていないような様々なエピソードを収集することができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計13件）

①丹羽典生 2010 「民族主義から多民族共生へ——フィジー諸島共和国における2006年クーデタの特質」塩田光喜（編）『グローバル化のオセアニア』アジア経済研究所調査研究報告書、71-89頁、査読有。

②丹羽典生 2010 「歳時世相篇 ヴァカタワセ——フィジーの年末の喧騒と新年祭」『月刊みんぱく 2010年1月号』、第34巻第1号、20-21頁、査読無。

③丹羽典生 2009 「時論・新論・理想論 余は如何にしてカヴァオロジストとなりしか」『月刊みんぱく 2009年11月号』、第33巻第11号、15頁、査読無。

④丹羽典生 2009 「紛争と政治的混乱——アフリカ化論の批判的検討を通じて」日本オセアニア学会（編）『オセアニア学』京都大学学術出版会、375-385頁、査読有。

⑤丹羽典生 2009 「万国津々浦々 南の島の楽観主義」『月刊みんぱく 2009年6月号』、第33巻第6号、14頁、査読無。

⑥丹羽典生 2009 「民族、階級、ガヴァナンス——フィジーの政治的不安定と2006年クーデタ」『季刊民族学』128号、79-84

頁、査読無。

- ⑦ 丹羽典生 2009 「渡邊先生と私」『渡邊欣雄先生退職記念文集』21-22 頁、査読無。
- ⑧ 丹羽典生 2008 「経済システムと民族的性向——フィジーにおける協同組合制度の導入過程の分析を中心に」『南方文化』35 号、101-122 頁、査読有。
- ⑨ 丹羽典生 2008 「かつて開発モデルと語られし村」『民博通信』122 号、20-21 頁、査読無。
- ⑩ 丹羽典生 2008 「ギルミティヤから二重に追放された人々へ——ブリジ・ラールの研究動向と生涯の覚書」『民俗文化研究』9 号、42-57 頁、査読有。
- ⑪ 丹羽典生 2008 「闘牛」「闘鶏」「パイナップル栽培」「平家伝説」「ヤーバン」渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也 編『沖縄民俗辞典』吉川弘文館、357 頁、357 頁、417 頁、459 頁、518 頁、査読有。
- ⑫ 丹羽典生 2008 「サトウキビ産業のたそがれ」『月刊みんぱく 2008 年 7 月号』第 32 巻第 7 号、14 頁、査読無。
- ⑬ 丹羽典生 2008 「フィジーにおけるキリスト教の布教（一九世紀前半）——宣教師ジェイムズ・カルヴァートの報告（一八五八年）」歴史学研究会 編『世界史史料 9 帝国主義と各地の抵抗 II』岩波書店、405-406 頁、査読有。

〔学会発表〕（計 8 件）

- ① 丹羽典生 2009 「イノセンスの終焉にて——独立期以降のオセアニアにおける＜紛争＞の比較民族誌的研究にむけて」『共同研究会「オセアニアにおける独立期以降の＜紛争＞に関する比較民族誌的研究」』12 月 19 日 国立民族学博物館（大阪府）。
- ② 丹羽典生 2009 「グローバル化と紛争の系譜——フィジーの 2006 年の政変を事例として」『共同研究会「グローバル化における太平洋島嶼国家」』12 月 5 日 アジア経済研究所（千葉県）。
- ③ 丹羽典生 2009 「はずれ者から見るオセアニア近代の民族誌——フィジーのラミ運動とその退会者の分析から」『共同研究会「生の複雑性をめぐる人類学的研究：「第四世界」の新たな記述にむけて」』6 月 27

日 九州大学文学部比較宗教学研究室（福岡県）。

- ④ 丹羽典生 2009 「民族化する国家と、離脱する人びと——フィジーのラミ運動による対抗的公共圏」分科会：オセアニアの多文化的公共圏における親密圏離脱のイデオロム（代表者：柄木田康之）『第 43 回日本文化人類学会』5 月 31 日 大阪国際交流センター（大阪府）。
- ⑤ 丹羽典生 2009 「民族化する国家体制と親密圏からの離脱——フィジーのラミ運動からみた公共圏の形成と特質」『共同研究会「脱植民地期オセアニアの多文化的公共圏の比較研究」』3 月 15 日 国立民族学博物館（大阪府）。
- ⑥ 丹羽典生 2009 「開発の記憶、奇跡の語り——フィジーの村落開発事業に関する調査から」『第 369 回みんぱくゼミナール』2 月 21 日 国立民族学博物館（大阪府）。
- ⑦ 丹羽典生 2008 「開発の意味を考える——フィジーにおけるダク村落開発事業を事例として」『第 212 回研究懇談会』9 月 24 日 国立民族学博物館（大阪府）。
- ⑧ 丹羽典生 2008 「開発モデル村の現在——フィジー、ダク村落の開発事業の継承と変化」『第 42 回日本文化人類学会』6 月 1 日 京都大学（京都府）。

〔図書〕（計 1 件）

- ① 丹羽典生 2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』明石書店、361 頁。

〔その他〕

- ホームページ
国立民族学博物館ホームページ
<http://www.minpaku.ac.jp/staff/niwa/01.html#thema>

<http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/20820068.html>

○新聞掲載情報

- ① 丹羽典生 2009 「涼を飲む (2) カヴァで寝不足知らず」・毎日新聞（夕刊）・8 月 12 日。
- ② 丹羽典生 2008 「異文化を学ぶ 便利？ 不便？ (2) カヴァの席を囲む」・毎日新聞（夕刊）・12 月 10 日。

○みんぱく e-news

<http://www.minpaku.ac.jp/e-news/>

①丹羽典生 2009 「ハイビスカス・フェスティバルと世界最高齢の大統領の引退」みんぱく e-news99 号。

<http://www.minpaku.ac.jp/e-news/99.html>

②丹羽典生 2008 「フィジー、ダクでの年に一度のお祭り『ダクの日』」みんぱく e-news87 号。

<http://www.minpaku.ac.jp/e-news/87.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丹羽 典生 (NIWA NORIO)

国立民族学博物館・研究戦略センター・助教

研究者番号：60510146

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし